
yes,subway!

雪夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

yes , subway !

【コード】

N1093Z

【作者名】

雪夢

【あらすじ】

サブウェイマスターと、私の話。

2525であげられてる動画ネタを含みます。

初め、出会い

ある曇りの日。

私は、下を向いて歩いていた

すると薄く、影がみえて

気付いた時には遅かった。

私はその人にぶつかってしまった

「すっ、すみません！」

急いで頭を下げる

「こちらこそすみません、怪我は無いですか？」

「はい、大丈夫です．．」

その言葉で顔をあげてみると、そこにはそっくりな顔の背が高い白
と黒の男の人が

「それなら、良かったです。」

「あの、御詫びしたいのですが・・・」

私がつつかってしまったのは、黒コートをきた方の男の人

「御詫びなんていいですよ。」

「こちらも前方不注意でしたし」

「でも・・・お願いです、御詫びさせてください」

そういつて私が頭を下げると、今まで黙っていた白いコートをきた方の男の人が、

「ノボリ兄さん、この子お願いとまで言ったんだし、素直に受けようよ。受けるだけが嫌ならこっちからも御詫びすればいいんじゃないの?」

「そうですね・・・頭を下げてくださいと言ったことですね」

やった・・・!

そう、私は一目惚れをしたんだ。

「あ、じゃあ私の家すぐそこなので、寄って行ってください」

そして、親は仕事に出掛けているから誰も居ない家に招待した

「どうぞ・・・あがってください」

「おじゃまします」

「おじゃまします」

「お茶いれますね。」

あ、何か苦手とかありますか？」

「私は特に無いです」

「ボクも特には無いかな？」

「じゃあ、どうぞ。」

お茶とお茶菓子です」

「いただきます」

「ねえ、質問してもいい？」

あ、今までのせりふ、上が黒の方。
下が白の方ですよ

「はい、何でしょう？」

「御名前は？ あ、ボクはクダリだよ！ こっちはノボリ兄さん」

「私は、ユキナって言います」

「ユキナちゃんか、しっかりしてるんだね！」

「え？ そ、そんなこと無いですよ！」

「こら、クダリ。 ユキナさんが困ってますよ」

「本当に！？ ごめんね？」

「あ、別に大丈夫ですよ。

楽しいですし、ノボリさん、クダリさん。 ありがとうございま
す」

「なんで御礼してるの（笑」

「そうですね、御礼を言うべきはじちらです。 ありがとうございま
す」

「いやいや、こちらこそです．．」

「ユキナさん、今度はこちらから、御詫びさせていただきます。今日はユキナさんに御詫びしていただきましたので、後日、連絡させていただいてもよろしいですか？」

「はい、いいですよ。」

「あ、今連絡先書きますね」

後日、連絡．．！

嬉しいけど、緊張はんばない．．

「はい、これ私の連絡先です。いつでも連絡ください」

「わかりました。一応私の連絡先、渡しておきますね。」

「はい、ありがとうございます。ノボリさん」

「いえ、こちらこそ今日はありがとうございます」

そう言って微笑むノボリさん。

か、かつこいい．．！！

勇気出して御詫びさせてくださいって言って良かった、本当に良か

った！

そして、その後しばらく話してわかったこと

2人はサブウェイマスターで、今の格好は制服らしい。
そして、買い物に出掛けて帰る途中少し横を向いたその間に、私とぶつかってしまったらしい。

その他には、クダリさんのノボリさんに対する事だとかを聞かされたり．．

かなり仲良くなれましたよ！
やりました、私頑張りました！

「じゃあ、失礼しますね」

「はい、またいつでも来てください」

「またね、ユキナちゃん！」

「はい、クダリさん！」

そして、ノボリさんとクダリさんは帰って行った。

楽しかったなあ．．

あんなに笑ったの久し振りかも知れない。

大爆笑を越えた笑いだったしね．．（笑

また会う日が楽しみだな！

これが、出会い。

そして、馴れ初めだったり

後日、御詫び

ああ．．緊張するよ．．
今私は、ノボリさんとクダリさんの家．．というより、サブウェイの事務室にいます。

そう、例の御詫びの件で。

電話がかかって来たのは昨日。
私達が出会った日から数えると、なんと次の日で。

つまり、今日は出会った日からみると2日後になる。

うーん、ややこしく感じる。

とりあえず、それは置いておいて！

とりあえず、今日は私が御詫びされる側で．．

なんだか落ち着きません。

「どうしました？ ユキナさん」

「えっと・・何だか御詫びされるとかなれてなくて・・」

そう言うと、ノボリさんは優しく微笑んでくれた

「緊張してるんですね、大丈夫ですよ、楽にしても」

「ありがとうございます」

ノボリさんの気遣いが嬉しかった。

だって、だって

好きな人に優しくされたら、もう本当に、嬉しくてね！)

「兄さん兄さん、これ届いてたよ」

実は今までいなかったクダリさんが帰ってくると、

ノボリさんに手紙を渡した。

読み終わるとノボリさんは、口をひらいた。

「．．。クダリ、また別の仕事みたいです。」

「今回は、１人？　２人？」

「私とクダリの２人だそうですよ。　完全版だと女の方が必要だそうです。」

「へえ、次の曲はまた今までと違うパターンか。」

２人が話してるのを聞いているのもいいけど、話にまぎってみたい気も．．

「あ、あの、何の話してるんですか？」

「うん？　えっとね、副業？」

「最近は何職業なんて言われますけどね、副業みたいなものです」

「副業・・・？」

「うん、えっとね。」

踊り手みたいな物だよ」

「お、踊り手・・・！」

「たいした物じゃ無いですけどね」

「でも、凄いです。私も踊り手やってみたいです！」

「お！ じゃあ、兄さん。 次の曲は、ユキナちゃんも っていうのは どうか？」

「そうですね、確かにユキナさんが入ってくれたらピッタリあいますしね。」

「？」

いまいち話がわからない・・・
私が入ればピッタリってどついう事だろう？

「ユキナさん、私達と一緒に踊りませんか？」

「え．．？ ええ！？」

「実は、僕達が踊る次の曲は、男2人 女1人の曲なんだよね。
どっっ。」

「どっ、どっ、どっしょう。」

やりたいものの、いきなりやりませんか困るしなあ。

「暫くは考えていただいても構いませんよ。

最長明後日までしか、のばせませんが．．すみません」

「い、いえ！ 考える時間下さってありがとうございます。」

「よし、じゃあ遊ぼうよ！」

「そうですね、クダリさん！」

そして、決断

その後は、クダリさんと遊んで、ノボリさんにバトルの仕方を教わったり。

2人のお陰で最近毎日が充実してるように感じます！

「それじゃあ、またねっ！」

「はい、明日も来ますね！」

「お待ちしています、ユキナさん」

「はい！ それじゃあ、また明日、ノボリさん！ クダリさん！」

「ばいばーい！」

「お気を付けて！」

手を振ってわかれた後の帰路で、ずっとどうしようか考えてた。

やりたい、けど何だかいけない気もする。

動画をあげるとなると、絶対、嫉妬とかからの批判がくる。

まあ、私可愛くないし。
運動はまあまあ出来ないし・・・

ああ、もう！

やりたいならやるでいいよね、うん。

迷惑じゃないといいけど。

何だかんだで家に到着。

「ただいまー。」

「あ、お帰りなさい。」

「お母さん！ 私ね、ノボリさんとクダリさんと踊り手みたいな
やろつと思うんだけど・・・」

「いいんじゃない？」

「え、いいの？」

「だって困る事はないでしょ？ やればいいじゃない」

「う、うん、わかった」

あっさりし過ぎてびっくりした

でも、これでノボりさん、クダりさんと出来るのか！
楽しみだなあ、

あれ、異変？

次の日、報告しようとして学校帰りに寄ってみた。

すると、なんか．．おかしい。

何がとは言えないけど、何かがおかしかった。

「こんにちは、今日何かおかしくありませんか？」

「あ、ユキナさん。そうですね？」

「はい、何かいつもより少し声高く無いですか？」

「そんなことはないよね、ノボリ？」

「ああ、はい。きっと無いと思われませんが」

「あれ？ ノボリさんが高くて、クダリさんが低くなってませんか？
でも、気のせいかも．．」

「そんなことはないよ！ きっと気のせいだよ。」

「そうですね、気のせいでしょう。」

「うーん．．あ、とりあえず報告しますね。私も一緒にやらせてください」

「本当に！ やったね！」

と、先に言ったのは、ノボリさんの服を来た方。

「やっぱり、今日おかしいじゃないですか（笑）なんで入れかわってるんですか、ノボリさん、クダリさん。」

「全く、やはりクダリがやらかしましたね。」

クダリさんの格好で言う違和感だらけですよ（笑）

「仕方無いじゃん！ だって、ユキナと一緒にやってくれるんだよ？」

「そうですね、私も嬉しいです。」

「でしょ？ 宜しくね、ユキナ！」

「私からも宜しく願います。」

「はい、宜しく願いますね！」

「あとクダリ、何故いきなり呼び捨てにしたのです？」

「ク、クダリさん・・・?」

ノボリさんの服を着たままだから、凄く近くでノボリさんのいい匂いがする。

安心するような、不思議な感覚になる、優しい匂い。

昔、お母さんに抱っこされてた時もこんな感じ、だったかな。

「あ、ごめん。つい癖で、嫌だった?」

「あ、いえ。い、嫌では、無かったです、驚いただけで・・・!」

「そう? じゃあ、良かった!」

「クダリ、マルチの仕事が入ったみたいです。」

「ええ、ユキナと遊んで居たいのに。」

「仕方無いでしょう、仕事は仕事ですから。それに久々の御乗車。次はいつになるかわかりませんよ。」

「・・・結局最後まで辿り着くのは極稀にしか居ないじゃん。」

「それでも仕事は仕事です。」

「あ、あの。」

私帰った方がいいでしょうか?」

「ええ、帰っちゃうの？ 一緒に乗車すればいいのに」

「すみません、ユキナさん。」

そう言って近付いてくるノボリさん。

すると、一枚の紙を渡された。

「クダリが居なくなったら、読んでください。」

そう言われて、即座にポケットにしまった。

「では、お気を付けて。」

「うう．．またね、ユキナ」

「はい、ノボリさん、クダリさん。あ、服を着替えて行ってくださいね？ トレーナーが混乱しちゃいます（笑 じゃあ、また明日
！」

これ、秘密内容？

「・・・何が書いてあるんだろう？」

ギアステーションからの帰り、気になって仕方無くなったから読んでみることにした。

『いきなりこんな事をして、すみません。』

お願いがあるので。

明日、ギアステーションではなく、ライモンジムに行っていただけませんか？

時間は17:00。

こちらから一方的にお願いするかたちになってしまいましたすみません。私は先に着くようにして、入口で待っておりますので。

明日くらいしか時間が無いのです。

すみませんユキナさん。

では、待っています。』

一番に思ったのは、ノボリさんがこうやって何かを知らせるのは珍しい、って事。

とにかく、明日行かないと。

そう言えば、ライモンジムには入った事無いな．．。

私、昔に何かあったらしくポケモンを持ってない。

最近お母さんにポケモンが欲しいって言ったんだけど、もう少ししたらねって言われた。

もう少しってどれくらいだろう？

うーん、何もわからなくなってきた．．

考えるのは止めよう。

そう言えば、何でクダリさんの居ないところだって言ったんだろ？
クダリさんに聞かれちゃ、見られちゃいけない事なのかな？

あ、考えるのは止めようって言ったばかりじゃん、何やってんだ
ろ？ (笑)

って言うか、明日学校じゃん)．．．(

間に合うようにしないかね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1093z/>

yes,subway!

2012年1月6日02時46分発行